

美しき清流は太古の森の雫より

第一話：寒バヤの巻き

立春あけやらぬ寒空の下、小生「チャラ三郎」引田橋の橋げたにかじりつく、吐く息は白く、鼻からは氷柱、まさに雪だるまのごとく凍りついていた。

悪ふざけが過ぎた為のお仕置きか、寒中水泳の真似事か、それとも寒さのせいで気が狂れたのか、何がしたくてそこに立つ。



「川いくけど、いっしょに行くべ」・・・

思い起こせば三十数余年ほど前、亡き親爺こと、「あゆ釣り名人“想石”」が「チャラ三郎」を釣りに誘うときの一駒であった。

「この寒いのに、何にしに行くんだ」・・・

正月料理に飽きたのか、パチンコでこてんぱにヤラレタ

腹癒せか、もはや釣りでしか癒せない釣り馬鹿親爺がそこにいた。

思えば、落ちあゆサクリ漁から既に三月半が過ぎ、釣り馬鹿の体は大鯉に引き込まれるが如く、いや自ら竿を握りしめ秋川に突っ込んでいったのである。

「こんな極寒に何を釣るんだ」・・・

「いいから来てみろ」、その言葉に「チャラ三郎」半信半疑についていくと、水深 1.5 メートルはある深トコの底に季節はずれの入道雲が映し出されているのかと思いきや、な、な、なんと大きな魚影が・・・

いやこれは大きな魚ではなく「ハヤの群れじゃねえか」その数 数十匹、いや数百匹、はいたろう！

「すげえー」と一声をあげたその瞬間

「どうだ、これが寒バヤだ。早くしねえとみんな釣っちゃうぞ！」

久々の魚群に後ろ髪を曳かれながら「チャラ三郎」は自分の竿を取りに物置めがけてすっ飛んでいった。



トンボ返りに川に向かう「チャラ三郎」の脳裏には大漁を疑う余地など、露のひと雫さえなかったのである。獲らぬ狸の皮算用、あの親爺にしてこの子あり、稀に見る釣馬鹿親子であった。

友釣りでは、まだまだ未熟であった「チャラ三郎」だが、ハヤ釣りならばお手のもの、あんま釣りで鍛えたこの指先

で入れ食いだべ！・・・・・・・・

ところが・・・何がどう違うのか、「チャラ三郎」の竿先はピクリともしないのである。

普段であれば一束釣りなど朝飯前なのに「何故に喰わんのか！」子狐の如く首を傾げる「チャラ三郎」の目の前で鼻の穴をおっぴろげ「入喰い」を連呼する親爺でいた。

「やられた！」「完敗や！」

夢か幻か「チャラ三郎」の頭の周りには星が幾つも飛んでいるかの如く見えたのである。

夏場であれば水深 10 センチに満たないチャラ瀬のあちこちで、我さきにと餌を捕食するあのハヤが、「何故に喰わんのか」?????

いや、待てよ！

この時期、何故この深いところばかりに群れているのか？・・・・・・・・

「そうだ棚や・・・・・・・・夏場と違う」

更に、親爺のヒットポイントをよく見ると、僅かではあるが川底から湧き水が舞い上げていたのである。

川底に沸き上げる湧き水の僅かなポイントだけがハヤの活性をあげていたのだった。

「そうだ、水深による温度差だ！」さすがは年の功、親爺はこれを利用していたのか。

なぞが説ければ、氷も解ける

「チャラ三郎」その後は、大岳山を飛び越えて銀河のはて迄飛んでいったのだった。



あれから三十数余年
川の流れも、底石も、大きく様変わりした
ものだ！

この寒空の下、かじりつく橋げたは三十
数余年前に伊勢湾台風で倒壊したまま、毎
年僅かずつ砂に埋もれながらも、その面影
を残してくれている。

秋川の「ハヤの甘露煮には地酒の千代鶴
がいちばんだべ！」と思うのはチャラ三郎
だけであろうか？

あの時の「ハヤの甘露煮」の味が忘れ
られず「チャラ三郎」今日も橋げたに
かじりつくのであった。

「秋川チャラ三郎」

